

# 情報入力の容易さを考慮した ボランティアセンターを中心とする活動支援システムの提案

池端 優二<sup>†</sup> 福井 悠<sup>‡</sup> 山田 俊輔<sup>‡</sup> 丸山 博史<sup>‡</sup> 塚田 晃司<sup>†</sup>

和歌山大学システム工学部<sup>†</sup> 和歌山大学大学院システム工学研究科<sup>‡</sup>

## 1 はじめに

日本では地震や台風など多くの自然災害の猛威と常に隣り合わせであり，特に規模が大きい場合は復興・復旧に向けて，被災地域外から多くの支援が必要となる．その中でも災害ボランティア活動[1]は被災地域の生活が安定するまで多くの人手を必要とする．ボランティア希望者は活動を行う日数や内容に応じて必要な準備物が異なるため，活動予定場所について情報収集が必須となる．

しかし，活動拠点となるボランティアセンターがホームページ等で発信する情報は主にボランティア募集状況や管理者が投稿した一部の体験談であり，事前準備の参考になるような活動に関する情報が十分に提供されていない．これによりボランティア参加に対するハードルが上がり人手不足の一因となっている．

そこで本研究では経験者がボランティア希望者に対して容易にノウハウを伝える場を提供し，ボランティア活動を支援するシステムを提案する．ボランティアセンターを中心として活動体験や持ち物に関する情報をボランティア希望者と共有することで，ボランティア参加に対する負担の軽減を目指す．

今回は情報の入力部分に重点を置いたシステムを提案し，プロトタイプを実装する．

## 2 関連システムと問題点

関連システムとして助けあいジャパン[2]やsinsai.info[3]が挙げられる．

助けあいジャパンでは，内閣官房震災ボランティア連携室と協力し，被害状況や復興の進捗，避難所やボランティアのニーズをまとめて公開している．ここではボランティア希望者向けに，既に活動を行った人のレポートがまとめられている．しかし，各市町村やボランティア団体のブログ等をまとめたものであり，一般の活動者がボランティアで得た情報

ではない．さらに，活動エリアの分類が広範囲なため情報の取捨選択が難しいといった問題点がある．

sinsai.info では位置情報を用い，それに紐付いた物資要請・避難情報といった様々な情報をレポートとしてまとめている．情報のカテゴリが異なる色に分けて多数用意されており，その中でも情報提供の多い地域はマップ上において数値とともに大きく表示され，提供している情報の視認性を高めている．しかし，このシステムで扱われる位置情報は誰でも任意に決めることができ，たとえ現地の状況を知らない人でも投稿することが可能である．よって，レポートとして投稿された情報の信憑性はシステム管理者が確認を取らなければ保証されないといった問題点がある．

## 3 提案システム

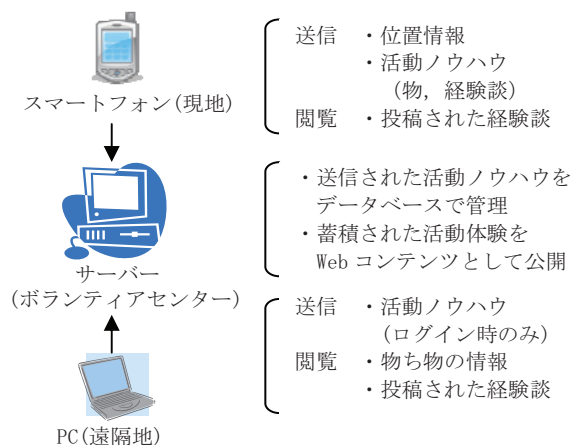


図1：提案システム

従来のシステムでは該当する情報の範囲が広く，ボランティア希望者は自分に必要な情報を見つけるのが困難であった．また，一般の活動者の体験談はあまり活用されてこなかった．そこで，提案システムではボランティアセンターごとに活動体験の収集・発信を行うことで，より活動拠点に密着した情報提供を可能にする．提案システムの全体像を図1に示す．システムの利用者はボランティア活動場所から活動体験を入力する現地ユーザーと，該当するボランティアセンターを拠点に活動希望の遠隔地ユ

A Volunteer Activity Support System on the Volunteer Center Considering Easy Data Input about Activity Report

<sup>†</sup> Yuji Ikebata, Koji Tsukada

Faculty of System Engineering, Wakayama University

<sup>‡</sup> Yu Fukui, Shunsuke Yamada, Hiroshi Maruyama

Graduate School of System Engineering, Wakayama University

ーザーである。

本提案システムで扱う情報は、持ち物に関する情報と活動体験に関する情報の2つである。持ち物については、必要だと感じた物・不必要だと感じた物の2種類を記述してもらう。次に、活動体験については、自由記述で活動内容や現地で感じた気づきについて記述してもらう。このように、発信する情報を2つに分けることにより、閲覧する際に効率良く情報を入手できる。

提案システムは Web サーバーとして PC をボランティアセンターに設置する。ユーザーはそこに対して PC,あるいはスマートフォンでアクセスすることによりデータの書き込みや閲覧、検索を行う。

### 3.1 現地のユーザー

現地のユーザーがシステムを利用する際、まず活動日数を含んだアカウントを作成してもらう。活動日数は選択式で「日帰り」、「土日のみ」、「2～6日」、「1週間以上」から選択してもらう。また、アカウント作成にはユーザーの位置情報を基に、実際に該当する地域で活動している人であるかを判定する。これにより、情報発信をするユーザーが現地にいるかどうかを確認することができ、情報の信頼性を上げている。

持ち物に関する情報は、複数のユーザーが同一の物を入力する可能性を考慮し、過去に入力されたデータを利用した入力補助機能を用いる。これにより、持ち物に関する情報入力の容易さを確保している。

発信する情報のうち、活動体験についてはその書き込みが現地での活動者宛か、今後ボランティアに来てくれる人宛かのどちらかを選択する。これにより、活動者がボランティアで得た情報を遠隔地の PC 閲覧用と現地のスマートフォン閲覧用に分類することができ、利用ユーザーに対してより効果的に情報を提供できる。

図2：活動体験の入力

また活動体験に関する情報を入力してもらう際、過去に得られた持ち物の情報の中から必要・不必要ともにランダムでそれぞれ3つずつ表示し、当てはまる回答がある場合のみチェックをつけ回答してもらう(図2)。これにより、持ち物に関する書き込みをしなかった人からも情報を得ることができ、より多くの回答を集めることができると考えられる。

### 3.2 遠隔地のユーザー

ボランティア希望者にとって、実際に活動予定の地域にいるボランティア活動者から発信される情報はより有用である可能性が高い。そこで、該当ボランティアセンターで運営するシステムにアクセスしてもらうことで、ローカルで利用者に即した情報を提供する。

ユーザーは実際に活動した人の体験談やアドバイスのほか、持ち物に関して、必要だと感じた物・不必要だと感じた物を書き込みが多い順に閲覧できる。また持ち物については、自分にあつた情報を容易に見つけるための工夫として、活動日数が近い人の情報のみを閲覧することも可能である。

さらに現地でのボランティア活動を終えた人が遠隔地から書き込みを行う場合、活動体験と持ち物に関する情報、どちらも現地にいた時と同様の情報発信を行うことができる。ただしこれは、アカウントを持つユーザーに限る。

## 4 まとめ

本稿ではボランティアセンターを拠点として、現地のボランティア活動者と今後活動を予定しているボランティア希望者の情報共有を行うシステムを提案、プロトタイプを実装した。提案システムを利用することにより、ボランティア活動者の経験が情報提供という形で活かされ、ボランティア活動に対する準備や具体的な活動内容などを事前を知ることを可能とした。これにより、ボランティア参加に対する負担を軽減することができる。

今後の課題として、公開する情報の見せ方など情報出力面における工夫・改善が挙げられる。

## 参考文献

- [1] 災害ボランティア活動  
<http://www.shakyo.or.jp/saigai/katudou.html>
- [2] 助けあいジャパン  
<http://tasukeaijapan.jp/>
- [3] sinsai.info 東日本大震災 | みんなでつくる復興支援プラットフォーム  
<http://www.sinsai.info/>